

## 貴重図書紹介

# グーテンベルク42行聖書



神学部教授 宮谷 宣史

本学では学術的価値が特に高く、高額な資料を入手するため「特別図書購入基金」を設け、特色ある蔵書（コレクション）の充実に努めている。これまでに「トマス・ポップス著作文庫」や「イギリス功利主義・原典コレクション」などがこの基金により購入された。

2001年度は「グーテンベルク42行聖書第2巻の2原葉」が購入され大学図書館に貴重図書として収蔵された。この聖書は1828年にドイツのトリアー近郊にあるオレビックの農家で第1巻は63葉、第2巻は261葉のみといった不完全な状態で発見された。1937年にサザビーズのオークションに出品され、収集家のアーサー・A・ホートン・ジュニアが購入し、1953年にはニューヨークの書籍商スクリプナーの手に渡った。本原葉はそれを分割して売却されたものである。今回の貴重図書紹介ではグーテンベルク42行聖書の歴史的、文化的意義について神学部の宮谷宣史教授に解説していただいた。

本大学図書館はグーテンベルクによる42行聖書を所蔵している。この聖書が世界で活版印刷された最初の本であることは良く知られている。それゆえに本書は大きな価値を有するものであるが、ここで改めて本書の歴史的な意義を考えてみたい。

教育と研究を主要な任務とする大学にとり、書物は不可欠である。本によって、過去および現在の、また世界各国や様々な民族の、あらゆる分野にわたる人間の知的遺産が保存され、伝達され、その結果普及し、何処でも、何時でも閲覧および利用可能になるからである。そしてそれを基に、さらに研究がすすめられていく。そこで多くの本を集め、所蔵し、それを教育と研究の為に提供している図書館が重要な意味をもつ。日本で毎年、約6万冊の本が出版されており、それに各国で膨大な数の図書が公刊されているが、本大学図書館では、毎年、内外の本を約5.5万冊購入しており、そして現在の蔵書数は140万冊である。この知的遺産の宝庫、図書館がなければ、大学はその機能を果たせないであろう。そしてこの貴重な本という知識の保存と伝達の手段を創り出し、可能にし、普及した大本となるのが、活版印刷術の発明である。

### 活版印刷術の発明

活版印刷術の発明者はドイツ人ヨハン・グーテンベルク（Johann Gutenberg, 1399頃 - 1468頃）といわれている。というのは、この有名なグーテンベルクに関しては資料的にあまり詳しく、正確なことは知り得ないからで



グーテンベルク42行聖書（復刻）

あるが、しかし、彼が新しい活版印刷術を発明したことは間違いのない。では彼の発明はどのようなものであったのだろうか。

古代や中世においては、印刷された本はなく、一般に原稿を手で書き、本を作っていた。そしてそれを他の人々が入手したり、読みたいと思う場合には、それを手で書き移し、つまり筆写し、写本を作っていた。そして当然ながら、写本をつくるためには、多くの時間と労力がいる、また知識や技術、経験が必要であった。そのため、特に中世ではキリスト教の修道院においてこの作業がなされ、修道士たちが写本室で、あるいは大学都市では写本職人たちが写本を作っていた。そして、写本は非常に貴重で、また高価であったし、一般の人々の識字率は低かったため、これらの手写本の利用はごく一部の人々

に限られていた。

グーテンベルク以前に印刷機がなかったわけではない。14世紀には、中国や朝鮮に木版による印刷があった。それは丁度、版画のように木に文字や絵を彫り、書物を印刷したり、織物に絵柄を印刷していた。この木版印刷によりすでに幾許かの小さな書物も作られていたが、あまり残存していない。ではグーテンベルクの発明した印刷術ないしは印刷機とはどのようなものなのか。

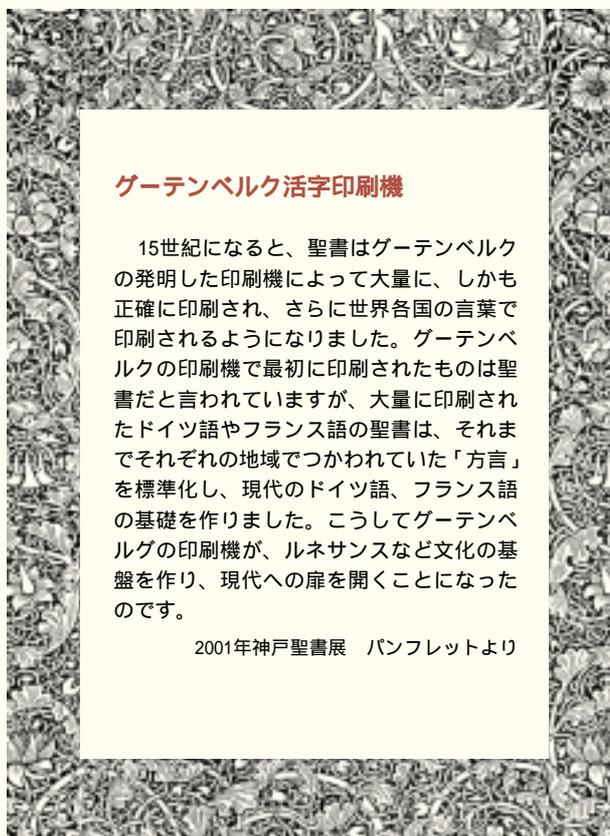
彼は活字を別々に作ることを考えた。金工師であったグーテンベルクは、その経験と技術を用いて個々の活字を金属で鋳造し、その活字を組み合わせ、植字して本を製作した。

つまり、彼が発明したのは、可動式の活字である。その上さらに、彼は植字架を考案して、印刷を容易に、かつ正確にした。これらは素晴らしい発明である。個々に鋳造されている活字は必要に応じて組み立て、1頁印刷し、その後でばらして、また自由に組み替えて新しい頁を作るし、試しに印刷した頁は、校正も出来るし、もし誤植があればそれも容易に訂正可能である。そのうえ植字架によって安定しているため、同じものが容易に多数印刷出来る。基本的にはこの印刷技術がこれ以後現代に至るまで使用されたのである。そしてこの活版印刷機により、つまり、手でなく、機械的手段による印刷技術の発明により、同一内容の書物が早く、多数印刷され、したがって廉価に販売されるので、従来の手写本に代わり、急速に普及していった。

グーテンベルクは1436年ころからアルザスのシュトラスブルに滞り、印刷機械の考案に取り組んでいた（この街の中心、有名な大聖堂の近くに、ルネサンス様式建築の前に、美しいグーテンベルク広場があり、その中央に印刷機と共に立っている彼の大きな銅像が今でもある。そして毎週土曜日には、この辺り一帯で古書の市が開かれ、多くの人々が賑わう）。その後、彼は、1444年から1448年の間にドイツのマインツに戻り、具体的に印刷機械の製造に取り組む始めるが、そのさい、彼は金融業者ヨハン・フスト（Johann Fust）から、設備のために借金をしている。その資金により、1450年頃、グーテンベルクは上述のような新しい印刷機械を作成し、活版印刷を始めた。そして6台の機械で、約5年かけて印刷し、完成した最初の本が聖書である。「これこそはまことに欧州活字本の揺籃、現今の書籍の生みの親である」（寿岳文章）。1455年ころ出版されたこの聖書は、3分の2は紙に、あとの3分の1は、羊皮紙に印刷された。全体で641葉からなり、2冊に別れているが、どの頁も左右2欄に組まれている。そして1つの欄が42行から成り立っているので、一般に「42行聖書」と呼ばれている（後に同じ印刷機で1456 - 58年に作られた聖書は36行であり、その後、48行のものなどもあり、それらと区別するため）この時、約180部ほど印刷されたと伝えられているが、現存するのは48部にすぎないし、しかもその大部分は不完全本である。



グーテンベルク活字印刷機（複製）H254xW163xD203  
兵庫県印刷工業組合所蔵



### グーテンベルク活字印刷機

15世紀になると、聖書はグーテンベルクの発明した印刷機によって大量に、しかも正確に印刷され、さらに世界各国の言葉で印刷されるようになりました。グーテンベルクの印刷機で最初に印刷されたものは聖書だと言われていますが、大量に印刷されたドイツ語やフランス語の聖書は、それまでそれぞれの地域でつかわれていた「方言」を標準化し、現代のドイツ語、フランス語の基礎を作りました。こうしてグーテンベルクの印刷機が、ルネサンスなど文化の基盤を作り、現代への扉を開くことになったのです。

2001年神戸聖書展 パンフレットより



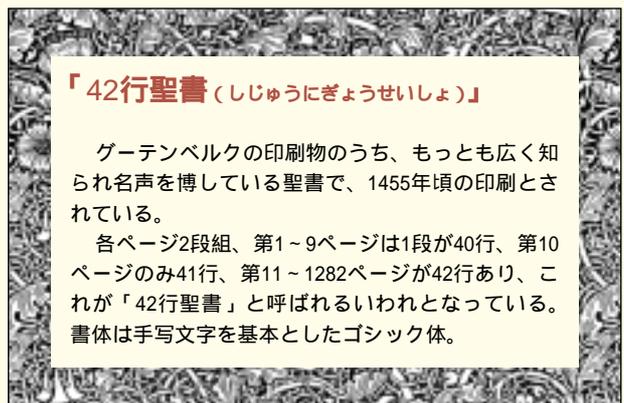
グーテンベルク聖書活字 組版（複製）  
兵庫県印刷工業組合所蔵

ところで、グーテンベルクは1455年、借金返済をめくりフストと争い、訴訟に負け、印刷機械をフストに取られてしまう。フストは彼の女婿ペーター・シェッファアの協力をえて、新しい印刷所をつくり、自ら印刷の仕事をはじめ。そこで、時期的に、グーテンベルクの「42行聖書」がこの前の出版か、後かで議論されているが、いずれにしろ、彼が仕事に関与していたと、言われている。なおこの工房で1457年に印刷出版された『マインツ聖詩集』は奥付（印刷の場所、日付、印刷者名などの書式で、それ以後の本に付すのが一般的になったもの）のある最初のものとして注目されている。

### 世界で最初に活版印刷機で印刷された本

グーテンベルクが最初に印刷した本、世界で最初に活版印刷機で印刷された本が、分量の少ない簡単なものではなく内容の多い厚い本、聖書であることは、作業上困難を伴ったはずであるが、しかし、いい選択であった。これは当時、丁度ルネサンスの時期に、聖書が人々の間で高く評価され、また聖書に対する期待と要求が大きかったことを意味する。しかも筆写の際の誤りや、欠落、勝手な変更などの多い手写本と異なり、活版印刷機による印刷は内容が同一かつ正確で、聖書として信頼に値するものであったから、大いに歓迎された。ところで、この42行聖書を見て、興味深いのは、この印刷された本が手写本の影響を受けている点である。写本は、その筆写のさいの問題は多くあったにせよ、中世において、

特に上述したように修道僧たちにより高度な技術を発達させ、そして美しい細密画を施した、芸術的な装飾をもつ聖書が多く作られ、残されている。そこで、このような手写本に代わるべき印刷機械による聖書も、それに劣らぬ芸術的な美しさを保持していることが重視されたのである。したがって、グーテンベルクの「42行聖書」も、イニシャルを大きくし、手書きで彩色して書き込んでだけでなく、たとえば、聖書の最初の創世記の箇所では、その内容と関わりのある多くの植物の絵が欄外に美しく多く描き添えられている。本学図書館の所蔵している、「42行聖書」の頁を見ても、1つの文書の始めの文字は6段抜きで大きく手書きになっており、また各章の最初の文字は印刷後に、手で描かれ、2段抜きで、紅色に彩色されている。活字はゴシック体で、単語、特に特定の名詞や前置詞などの省略法は写本の習慣に従い同じように適用されており、各文字の形態も中世の手写本の伝統を受け継いでいるが、それらよりはるかに読みやすく、しかも美しい。「42行聖書」をみていると、写本技術と芸術の遺産を尊重しながら、また継承しつつも、それ以上に優美な本をつくらうとしている、製作者の情熱を感じる。そしてその結果、実際に、文字（活字）も、紙も、インクも、印刷も、手書きされている絵やイニシャルも、実に精密で、その本としての完成度は極めて高い。つまり、技術と芸術がみごとに調和していると言えよう。人類の歴史で最初に印刷された本、この聖書は、これ以後のすべての図書の産みの親であるだけでなく、その質において、図書として最初にして最高の傑作である、と言っても過言ではないであろう。



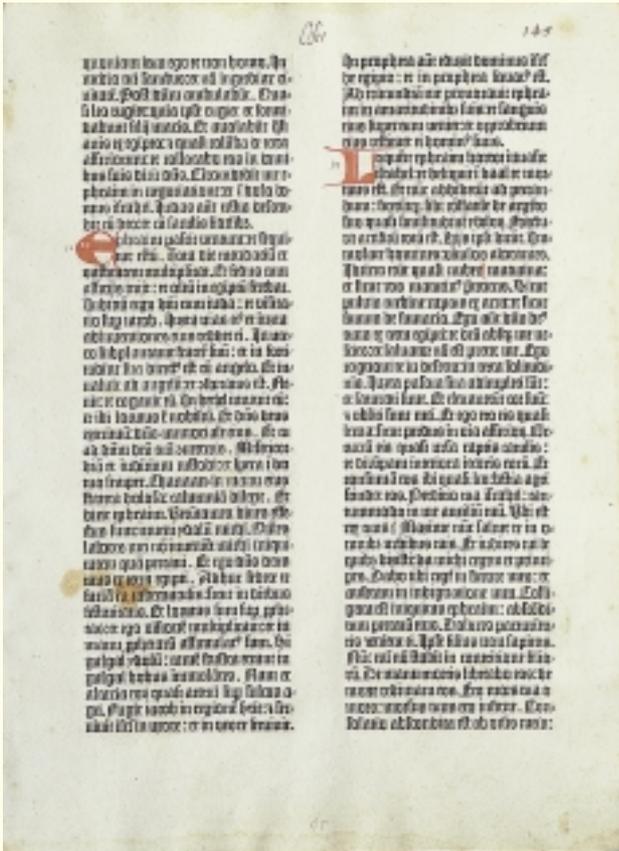
### 「42行聖書（しじゅうにぎょうせいしょ）」

グーテンベルクの印刷物のうち、もっとも広く知られ名声を博している聖書で、1455年頃の印刷とされている。

各ページ2段組、第1～9ページは1段が40行、第10ページのみ41行、第11～1282ページが42行あり、これが「42行聖書」と呼ばれるいわれとなっている。書体は手写文字を基本としたゴシック体。

### 文化史的に大きな意義

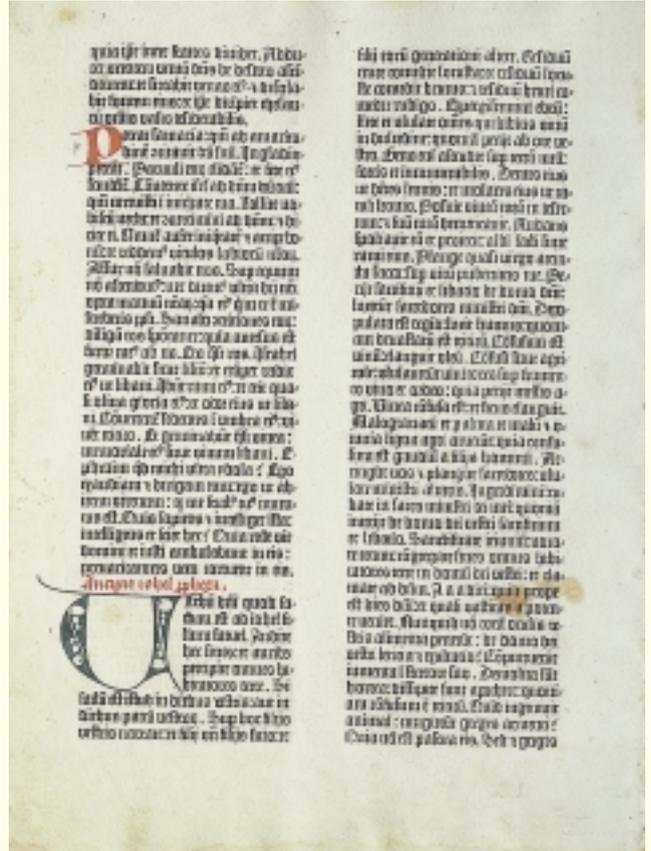
グーテンベルクの活版印刷術と活字本製法の発明による印刷機械の普及は、文化史的に大きな意義をもっている。この技術は10年もたつと、国により多少の相違はあるが、ヨーロッパ各国、各地に広がっていった。すでに1460年代には、ドイツの他の地域、スイス、アルザス、



グーテンベルク聖書 紙葉 145表

イタリアに広まり、70年代には、さらにフランス、オランダ、スペイン、ハンガリー、ポーランド、イギリスなどでも、印刷が行なわれるようになり、その影響はヨーロッパ全体にとり極めて大きかった。特にルネサンスにおける文芸再生の運動が起っていたイタリアには、1464年には伝えられ、なかでも紙の製造の盛んな地方では、それとの関連で印刷術が普及した。つまり、ルネサンスの起りの原因の一つは、古代ギリシャ・ローマの学芸の研究であるが、活版印刷機械のおかげで、人文主義者によって古代の文献が容易に印刷され、出版され、学ばれ、読まれるようになった。とにかくイタリアには短期間に最も多くの印刷工房がつくられ、活字本の出版が盛んになった。そして多くの刊本は当時の文化の発展に貢献した。たとえば、ヴェネチアでは書籍産業が起り、また、フレンツェのメディチ家によるプラトン・アカデミアでは、印刷された古代の学芸に関する文献がよく研究され、それを巡り議論されていたが、よく知られているように、ここで、フィチーノも、ピコモ、ポッティチェリやミケランジェロなども古代の学芸にふれ、おおいに啓発され、その思想と作品に大きな影響を受けたのであった。

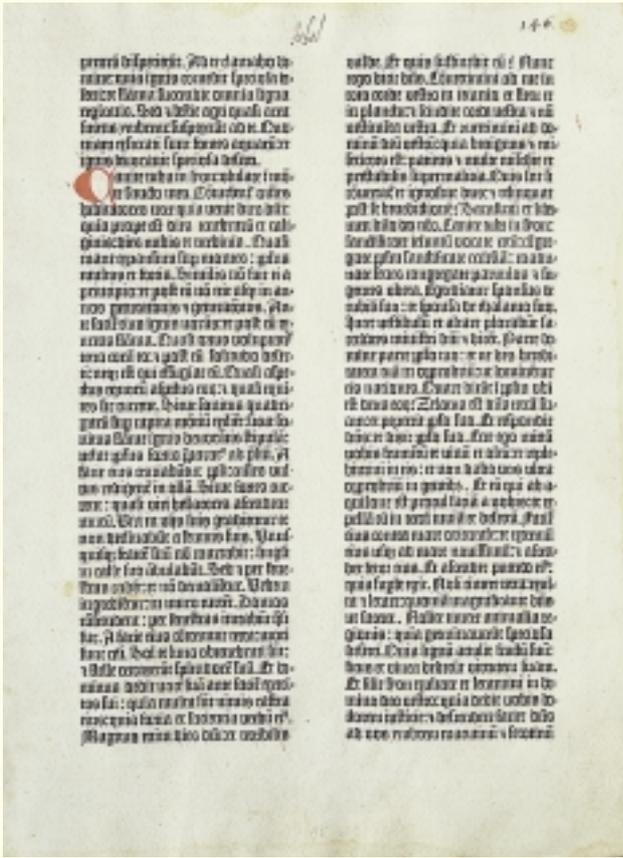
16世紀初頭、ドイツで、M. ルターによって始められた宗教改革の運動とその展開は、印刷機械の存在を抜きにしては考えられない。ルターの考えと書いたものは、すぐ印刷され、パンフレットやピラとして、また本として、ヨーロッパ中に広まっていった。印刷による情報の



グーテンベルク聖書 紙葉 145裏

伝達手段が無かったとしたら、彼の考えは、広く、早く人々に知られることもなく、従ってまた支持者を見出すことも困難であったであろう。幸い、彼の考えは印刷され、それが販売され、広く流布したために、宗教改革運動は発展し、また成功しえた。この事態はスイスでもオランダでも同じで、印刷技術と書籍産業は宗教改革運動にとり力強い情報伝達手段として大いに役立った。

グーテンベルクによる新しい活版印刷術の発明とその印刷機械の普及は、ヨーロッパに文化的大革命をもたらすと同時に、未曾有の経済的発展をもたらした。手写本に代わる安価な本の印刷、出版、取り次ぎ、その販売が大きな社会的、経済的な影響をおよぼしたからである。まず、印刷機械の設備のために大きな資本が必要であった。また、印刷の工房には大量生産をするために、たとえば、植字工、印刷機械係、校正者、製本師、彩色係、挿絵師、販売担当などのような多くの労働者が必要であった。大量生産により競争に勝つために、莫大な投資と運転資金を投じ、26台の印刷機械を所有している企業家も現れた。また、大きな工房では100名以上の労働者が働いており、企業家に対して労働者が、たとえば、1540年前後には、パリとリヨンで、待遇改善のためにストライキが行なわれた記録もある。印刷業が盛んになるにつれ、刊本を販売する書店もあらわれた。また、多数の労働者をかかえている設備の大きな印刷工房だけでなく、ごく小さく、個人的なレベルで働く人もあった。たとえば、



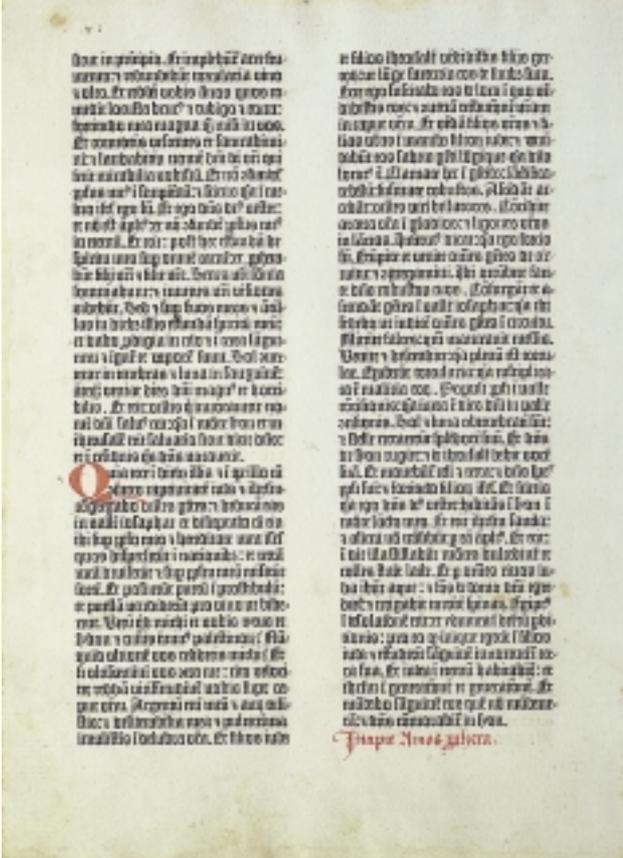
グーテンベルク聖書 紙葉 146表

時事問題などをまとめて印刷し、簡単なピラやパンフレットにして販売し、今日でいう新聞の先駆けとみなされるような仕事と取り組む人もいた。これらはまさに、活字印刷技術の発明により、ある意味で、近代的な産業形態が出現し、当時のヨーロッパ社会の発展に多方面で影響を与えたことを表している、と言えよう。

**本学図書館所蔵「グーテンベルク42行聖書」**

さて、本学図書館が所蔵しているのは「グーテンベルク42行聖書」の原本第2巻の原葉2枚、145と146で、計4頁である。内容は旧約聖書12預言書中の『ホセア書』11章9節から14章10節（最後）までと『ヨエル書』（1章 - 3章）全文を含んでいる。本文はラテン語訳聖書（ヴルガタ訳）である。不完全本から抽出された原葉で、1つの文書全体を含む連続している2葉が一緒であることは極めて稀有のことで、それ故にこれは非常に貴重である。そして、上述したように、その印刷の美しさをぜひよく見て、味わってほしいし、また同時にこの最初の印刷された聖書のもつ歴史的意味を感じ取ってほしい。

紙葉145の表と裏の一部には、『ホセア書』の最後にある有名で、内容的に感動的なエフライムの回復と祝福が記されている部分が含まれている。活字の文字の形態も並びも、紅色に着色されているイニシャルも、鮮明で美しい。145の裏面左欄、下の赤い文字で記されている箇所が



グーテンベルク聖書 紙葉 146裏

ら『ヨエル書』が始まり、紙葉146の表と裏の最後まで続く。そして『アモス書』のタイトルが赤色で記入されているところで終わっている。『ヨエル書』は、その内容がペルシャ時代の末期の社会情勢を反映していることから、紀元前350年ごろ成立した文書で美しい韻文で書かれている。それを世界で最初に印刷された聖書で読めるのは至福と言えよう。それに「主の日」におけるイスラエルの救いを予言している本書の内容とその迫真力に満ちた黙示文学的な文体も興味深い。神が老若男女、階級の上下を問わず、その霊をすべての人に与える、という本書の予言は、新約聖書にあるキリスト教によって実現される。その意味で、この原葉の持つ高い歴史的な価値と同時に、われわれは、そこに含まれている文書の内容の素晴らしさにも改めて注目したい。

**宮谷 宣史**（みやたに よしちか）  
 神学部教授  
 専攻 歴史神学  
 ヨーロッパの歴史、社会、宗教、思想、文化（文学、美術、音楽、演劇、建築、制度等）の理解を深めるために、それらとキリスト教の関係を歴史的に検討するのが私の関心である。あるいは、キリスト教が何故、またどのような思想・文化を生み出したのかを考察することである。  
 著書 Spiritus et littera bei Augustin, 2 Bände (Diss. Heidelberg)  
 『アウグスティヌス』(講談社) 他